

第IV部門 歴史的街並みの変遷 ～西宮と宝塚を対象に～

大阪工業大学工学部 学生員 ○新谷 寛
 大阪工業大学工学部 小寺 克典
 大阪工業大学工学部 正会員 吉川 眞

1. はじめに

わが国は、高度経済成長期の急激な発展に伴い、量的には豊かな社会基盤が整備された。その反面、個々の地域が持つ固有の歴史や文化といった地域性が失われることになった。歴史を現代に継承する貴重な資産である歴史的建造物も姿を消すこととなった。とくに兵庫県南部では、阪神淡路大震災や、その復興事業の影響に伴い、かつての街並みは大きく変容している。そこで兵庫県では、歴史的建造物などの文化財の発掘や、評価、修理、保存に当たるとともに、積極的な活用を図るヘリテージマネージャー制度がつけられた。さらに、近年の美しい国づくり政策大綱の策定や景観法の施行などにみられるように、今後は、歴史や文化を活かした質の高い社会基盤整備が望まれている。本研究では、地域に眠る歴史的文化遺産を発見、保存、活用することで地域性を活かした街づくり支援を目指している。まず、地域性を把握するために、散在している歴史環境を集積しデータベースとして構築している。さらに、構築されたデータベースを活用することで、現代に至る都市形成過程を視覚化し、地域性を把握することを目的としている。

具体的には GIS を活用して、複数の旧版地図を重ね合わせ、都市形成過程を紐解いている。さらに、対象地における特徴的な要素である酒蔵や街路に着目し、変遷を把握している。くわえて、その過程で構築された歴史環境データベースをデジタル・アーカイブとしてストックし、将来の資産となることもねらっている。

2. 対象地の選定

本研究では、西宮市、宝塚市を対象地としている（図－1）。両市は兵庫県南部に位置し、ともに大都市近郊の衛生都市としての機能を有している。また、震災で大きな被害を受けている地域でもある。

西宮市は、江戸時代に「宮水」が発見され酒造業が盛んとなり、「灘の生一本」の生産地として全国的に有名となった。また、西宮市における酒造業が始まったのは、少なくとも室町時代まで遡ることができ、多くの酒蔵が建ち並び、周囲を圧倒する酒蔵群であったといわれている。現在、往時の面影を残す街並みはわずかであるが、地域振興活性化事業として宮水庭園などを整備するほか、平成9年度からは、「日本酒」をテーマとしたイベントが盛んに行われ、復興に向けての努力が続けられている。このような背景から、酒蔵はかつての西宮のアイデンティティを構成していた重要な要素であると考えられる。

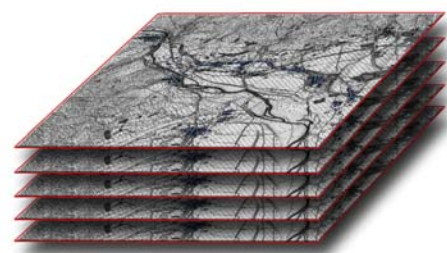
一方、宝塚市は、小林一三の阪急資本によって阪急沿線郊外ユートピア構想として戦略的につくられた街である。また、「荒神さん」の名で親しまれ、本尊には国の重要文化財指定の大日如来座像を有する清荒神清澄寺や、「安産の観音様」として有名な中山寺、売布神社など、古来より深い歴史を持つ寺院が、巡礼道沿いに存在していた。近年、街のメインストリートとしての意味合いが強まっている「花のみち」は、歌劇、温泉、遊園地といった、モダンな雰囲気が漂う空間に囲まれ、駅と娯楽施設をつなぐ空間として多くの人に愛されている。まさに、花のみちとその周辺環境は現代における参道空間と考えられる。



図－1 対象地域

3. データベースの構築

地図は、作成された時代の地理的な状況や土地利用といった過去を知りうる貴重な情報である。そこで、地域性を把握するために、国土地理院が発行している旧版地図を用いてデータベースを構築している。具体的には、幾何補正機能を有している GIS を活用して、現代空間上に定位し、地形図データベースを構築している（図－2）。構築した地形図は、明治 42 年、昭和 7 年、昭和 22 年、昭和 44 年、平成 11 年である。さらに、西宮市のアイデンティティを形成していた重要な要素である酒蔵をデータベース化している（図－3）。この酒蔵データベースには、属性情報として酒蔵の屋号や銘柄などが格納されている。また、宝塚市においても、施設と施設を結ぶ空間として「花のみち」に着目し、都市変遷をデータベース化している。



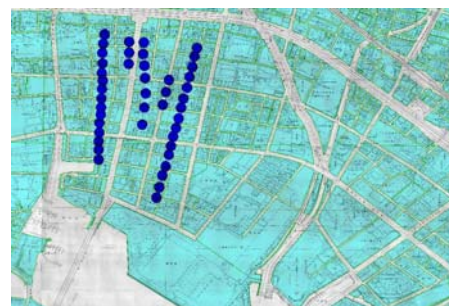
図－2 地形図データベース



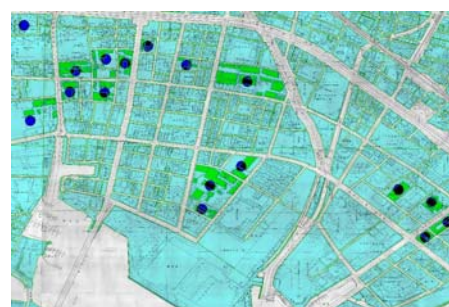
図－3 酒蔵データベース

4. 変遷把握

構築したデータベースを活用することで、街並みの歴史の変遷の把握を試みている。西宮市において慶応 3 年の酒蔵は、南北に連なって建ち並んでいたが、昭和 57 年以降では、その並びは見受けられない（図－4）。これは、昭和 20 年の空襲により、往時に酒蔵が存在していた地域が壊滅的な被害を受け、再建に伴い建て替えられたことが理由である。昭和 22 年の旧版地図を概観してみると、その地域の建物群が失われていることが視認できる。また、昭和 57 年以降では、建て替えなどによる酒蔵の移動はとくに見られず、減少していく傾向にある。時間の経過に伴い失われた酒蔵の跡地には、ショッピングモールやホームセンターなどが建設されたことが把握できた（図－5）。



図－4 慶応 3 年の酒蔵の配置



図－5 現在の酒蔵の配置

一方、宝塚の花のみち周辺では、明治 42 年に田畑であった地域が昭和 7 年にはルナパークへと変貌している。その後、昭和 7 年には宝塚ファミリーランドが建設され、現在ではガーデンフィールズに姿を変えている（図－6）。花のみちは明治期では堤防として存在していたが、昭和 7 年には、花のみち周辺地域が観光地として栄えたことをきっかけに、今日に至るまで、宝塚歌劇場と阪急宝塚駅といったような周辺施設をつなぐ参道空間として栄えていることが把握できた。

5. おわりに

本研究では、酒蔵や花のみちという地域のアイデンティティを形成していた要素をデータベース化することで、街並みの変遷過程の一端を把握することができた。今後は、データベースを拡充させることが当面の課題であると考えている。また、本研究で構築してきたデータベースを活用し、景観シミュレーションへと展開を図ることで、よりわかりやすく変遷過程を視覚化することが必要であると考えている。



図－6 花のみち